令和４年度 第１回 南海医療センター地域協議会 議事

【日　時】 令和４年１２月８日（木）
【場　所】 新型コロナウィルス感染症流行により書面開催
【議　題】 １．南海医療センターの診療体制について
２．診療実績について
３．ヘリポートの運用について
４．災害拠点病院としての役割について
【出席者】（外部委員）

行政代表者	大分県南部保健所長	糸長 伸能 様	
行政代表者	佐伯市福祉保健部健康増進課長	加藤 壮二 様	
医師会代表者	一般社団法人佐伯市医師会長	島村 康一郎 様	
関係医療機関	すどクリニック院長	簀戸 聖子 様	
病院利用者代表		山中 琢磨 様	計５名

（南海医療センター）

院長	森本 章生	
副院長	溝口 哲	
看護部長	奥野 美穂	
事務長	小野 宏	計４名

【概　要】
議題１「南海医療センターの診療体制」について
（令和４年度の新体制紹介について）
副院長、診療統括部長、医局長、常勤医師総勢２３名の紹介。
今年度変更のあった診療科は、血液内科が２人体制、外科が４人体制、また大分大学医学部地域枠卒業３年目の医師が大分県より配置され、当院の救急科に所属し実践の臨床経験を積んでいる。
（地域の中核病院として）
常勤医師の居る診療科を増設したいと計画している。まずは感染症指定医療機関として新型コロナウィルス感染症に対応するため、呼吸器内科医または感染症専門医の常勤医が必要と考える。大分大学医学部への医師派遣依頼ならびに大分県福祉保健部への協力依頼を継続して行っている。佐伯市の医療や中核病院としての当院に必要と考える当院に常勤医師のいない診療科においては、引き続き大分大学医学部の状況を見ながら派遣依頼をしていく。
議題２「診療実績」について
（診療実勢について）
外来患者数ならびに入院患者数は、いずれも横ばい。昨年と同様、佐伯市の人口減少、

新型コロナウィルス感染症の影響などが考えられる。 心臓カテーテル検査関係は、過去最多となり、診断カテーテル検査ならびにインターベンションともに増加し、県内の心臓カテーテル検査を行っている施設の中で、当院が３番目に多い施設となった。内視鏡検査関係は上部消化管内視鏡検査はかなり増加、その他検査はほぼ横ばいとなっている。全身麻酔下手術件数は昨年比でやや減少。人工透析患者数は増加の一途をたどっており、１８０名になろうかという状況。人工透析を必要とする症例の増加と、新病院になり透析ベッド数を６０床に増床したことなどが考えられる。心臓カテーテル検査・腹部外科手術・人工透析は、当院が中心となって担っている領域であり、引き続き体制を維持してく所存である。

議題３「ヘリポートの運用」について

（運用状況について）令和元年１２月に完成、その使用認可を得るのに時間がかかり使用開始は令和２年７月であった。使用を開始するにあたり、大分大学医学部高度救急救命センターに御協力いただき訓練を行った（訓練の内容について本文を参照ください)。運用実績は、令和２年８月から令和４年１１月までのドクターヘリ飛来件数３８回（防災ヘリ１回)、搬送先は大分大学医学部に３１回、他は当院で受け入れている。また、近隣の医療機関からのドクターヘリによる搬送時も使用を開放しており、佐伯中央病院５回、西田病院３階、長門記念病院１回、曽根病院１回の搬送実績がある。救急科の開設、ヘリポートの設置を行い、大分大学医学部高度救急救命センターとの連携が迅速にとれるようになり、今後も佐伯市の救急医療に貢献できればと考える。

議題４「災害拠点病院としての役割」について

（日向灘地震の対応について）

令和４年１月２２日午前１時８分に日向灘地震が発生、佐伯市は震度５強、一帯は停電となった。当院災害マニュアルに従い、午前１時３１分災害対策本部を立ち上げ活動を開始した。院内の被災状況は、新病院となり免震構造であることから、院内の物は何一つ落下することなく被災なしの状況であった。停電に対しては、非常用発電機が起動し全館に電気の供給が開始されたため、何一つ困ることはなかった。ＥＭＩＳを立ち上げ、佐伯市医師会とも連絡を取り、各施設の状況を確認しながら、当院でできることにて対応した。かなりの数の職員が参集し傷病者の受け入れ待機をしていたが、傷病者の受診はなく幸いであった。新病院となり今回のような震度の強い地震は初めてであったが、災害拠点病院としての役割を充分果たせるという確信が持つことができた。

南海医療センターとして県南医療圏の急性期医療を担う中核病院として、地域医療を支えていく所存です。

－　以上　－